

## インフラメンテ会議九州フォーラム

# 技術者不足の解決模索

## 地域特性理解でカバーも

インフラメンテナンス国民会議九州フォーラムは7月30日、福岡市のTKP博多駅前シテイセンターホールでキックオフフォーラムを開いた。産学官民から約300人が参加し、講演会やパネルディスカッションを通して、技術者・予算不足などの九州におけるインフラメンテナンスの現状と課題について認識を共有し、解決策を模索した。写真。



会議の公認フォーラムとし

インフラメンテナンス国民で、九州フォーラムはことし1月に設立した。産官学民の連携を軸に、九州のインフラメンテナンスに関する自治体支援や技術開発の推進に向けた情報交換、ベストプラクティスの水平展開、取り組みのマッチングによる課題解決策の構築などの活動を行う。

冒頭、あいさつした松田浩長崎大副学長は「土木は主に税金で賄われる。市民の合意形成がなによりも大事」と述べ、同会議が目的の1つに掲

げる「市民参画の推進」の意義を強調した。この後、吉田邦伸国土交通省総合政策局事業総括調整官が「インフラを取り巻く状況とインフラメンテナンス革命」をテーマに講演したほか、森尾宣紀長崎市中央総合事務所理事が長崎市のインフラメンテナンスの取り組みを紹介した。

パネルディスカッションでは「九州フォーラムへの期待」をテーマに、パネリストとして松田副学長のほか、福岡県

東峰村の澁谷博昭村長、熊本県玉名市の木下義昭建設管理課参事、LOCAL&DESIGNの高山美佳代表取締役、藤巻浩之九州地方整備局企画部長を迎えた。コトディネーターはツタワルドボクの片山英資代表理事を務めた。澁谷氏は、2017年九州北部豪雨の復旧に取り組み中で、課題として技術職員と予算の不足を挙げた。「技術職員はゼロでコンサルタント任せ。設計内容をチェックする能力も、設計書と併りに工事が進んでいるかも分からない」と現状を訴えた。

同様の課題を抱える玉名市では直営による橋梁補修事業を始めた。木下氏は、「毎日橋を見ることで、橋の表情の変化に気づき、劣化度合いがわかる。地域特性の理解で技術力をカバーする。大幅なコスト縮減にもつながった」と施策を紹介。また、劣化した橋を「多様な劣化損傷事例」と発想転換し、実証フィールドの場として新技術・新材料を試験したい企業に提供しており、「失敗しても、何も無いよりかはいい」とした。市民参画の推進については、高山氏が「主婦層では風水が流行している。これにあまり、メンテナンスするところの運気が上がるという仕掛けができないか」と提案。藤巻氏は「事業推進には組織内の理解も大切」とし、そのための組織内広報の重要性を訴えた。